

齊の愛妾柳氏の謀に陥りて誅へられたる始末に關する史料たり、虞山勝地紀略は張應遴の著にして常熟の名勝を説き、琴川三風十景記は瀛若氏の編する飲食起居の風俗志、趙始末は丹陽縣儒學教諭畢人祝化雍と前明の進士趙宦との隙事を叙し、鼓兆祚著の邑侯子公政績紀略は子公の政治逸聞を志す、恭紀御試は康熙五十一年三月二十四日御試の有様を詳記せり、康熙三十五年及雍正二年に起りし常熟の海嘯始末を述べたるものは潮災紀略にして、咸豐同治年間に於ける珍寇蘇州常熟侵入の慘狀を記せるものは常熟記、始末及び守戍日記なり。

●虞山叢刻第一輯

天啓宮詞は秦閩徵楚方父の著にして、秦楚芳は宮詞の作家として有名なる人。收むる百首は明朝内殿の面影を偲ぶ史料たるを失はず、崇禎宮詞は王舉昌露清の著し、吳理靜川の註せるもの、崇禎年間明宮の空氣を味ふに足る、吾炙集は錢謙益が錢遜王、黃翼、鄧漢儀、馮鼎夢、沈祖孝、光熊幻佳、唐允甲、趙疑、王天佑、等二十一人の詩を編纂せしもの、霜猿集は周同谷が明末の世相風俗に關する詩と昔を追懷する有聲の畫とを集めたるものなり。

●虞山叢刻第二輯

東山詞和集は錢謙益の詩並に之に唱和せし各家の詩を收め、古八詩、和今八詩、和女人詩、野外詩の四卷は汲古閣主毛晋子晋の文學的作品にして、出版校勘方面のみに重んぜられて、其詩人としての位置の忘れられむとする嫌ある毛晋の半面を知るべき好文字た

り。隱湖題跋二集は毛氏の文章を集められたる文章家としての彼を見るべきもの、以介編は陳璵の撰に係り、毛子晋が六十の壽賀に際し當時の諸名士の贈りたる詩を集む。(以上那波)

●概観世界史潮

坂口 昂著

本書は著者が最近眞宗大谷大學 京都府教育會學術研究所及び奈良女子高等師範學校の需に應じて、各文明史西洋史概要最近世界史の題下に試みし講義又は講演を基礎とし、これに根本的修補を加へて首尾一貫したる述作となせるものなり、題名の示せる如く悠久に流れ盡ぬ文化的主潮を追究探明するを以て、世界史研鑽者の使命とせる著者の見地より、世界史潮の源流を探り、其波動を追ひ、其行方を究めて、現代文化諸要素の由來する所を闡明し、以て既往の社會生活と所産文化の概観を讀者の眼前に展開し來らんとするもの、即ち本書の内容に現れたる著者の目的態度なりとす、本書の結構は講述體にして、全編二十五講より成り、各講主題の下列に細目を具ふ、第一講「古今の關係 古典と現代」は一篇の序説として、著者の世界史觀を披瀝せるもの、さへ、古典時代と近代期と二面に展開し行ける文化生活の推移變轉に、最古の東方文化時代を加へて、恰も三日の且暮相次ぐ世界史の經過を概観し、最後に文化史敘述に、政治上の生活を除外するフライタツ、ハ一派の超國家的態度を却け、著者の本講述に於ける態度用意を表明し居れり、第二講「希臘國民的文明」に筆を起して、第六講「基督教の興起 加特力教會の成立」に古代期の敘説を結び、第七講「古代より中古へ 原始ゲルマニ文明」より第十三講「近代國家の起源」に互つて、中世期の推移を述べ、第十四講「學藝復

興」に近代生活の發端を指示し以下第二十五講「世界戰役 世界改造」の現時に至る近世文化の複雑多様な形相を文化的史潮の交流下に分析し統合して其大局を把握解明し居れり概して古代及び中世の部分が大きいに簡約され居るは聊か惜しき心地すれども近世に現代期の文化生活に就いては最も精到なる史的省察を試み讀者に切實なる感銘を與へしむるものあり本書は著者の自序にある如く現下の世界改造期に當りわが讀書界に必要缺くべからざる世界史の敷養を與へん爲に公表されしものなるか故に専ら叙述の平明を旨とせられしと雖も博士の學殖と識見とは含蓄に富みし辭句要約洗練を経たる行文の間に充溢するを覺ゆるなり。(岩波書店發行、價五・五〇)〔植村〕

●印度の佛教美術

松本文三郎著

本書は大正七年八月京都大學の夏期講演會に於いて「古代印度の佛教美術と東洋に於ける其の影響」と題して著者の試みられたる講演の骨子に修正増補を加へて印行せしものなり本文四章より成り第一章敘論に於いて初に叙述の範圍の西紀前三世紀の中葉より後七世紀に亙る間の印度佛教美術及び其の東亞に及ぼせる感化を説くにあるを云ひ其の研究の由來より印度史の概觀と其の美術の唯心的超越的象徴的神秘的及び利他的なる五特質に關する透徹せる觀察を試み以下本論を建築彫刻繪畫の三章に分ちて詳論せり建刻の章にては其の由來より印度佛教建築の主要部を形成する塔及びその附屬の周垣、門の様式變遷を述べ支那の雁塔や日本の塔に及びまた石窟にて其の制を見る洞多堂、毘阿羅を説き柱と幢に

關して附記する處あり彫刻の章は先づ現存最古の阿育王時代の遺物を擧げて當時佛像の存せざりし理由に就いて觀察し次に印度に於ける佛像の二大流派をなす犍陀羅式と毘多式との二者の特徵源流變遷相互の關係價值等に互りて詳細なる研究を試み毘多式の彫刻を以て佛教美術の粹なりと云ひ支那の造像に及ぼせる影響の主として此の系統に屬すべきを遺物上より立論せる處所最も觀る可し繪畫の章は文獻上より其の畫題と性質とに就いて考察し主としてアザヤンター石窟寺の壁畫を論じて我が國法隆寺の壁畫に及びりなほ附録にアザヤンターと西域記阿折羅伽藍なる一文あり印度の美術に就ては四人の研究あり其の東亞に及ぼせる影響如何は研究上興味ある題目として從來我が學者のこれを論ぜしもの少なからざるが本書は博士の深き印度學の知識に基きこれを貨物に徴して立論せられたるものなれば關野工學博士の近く建築雜誌四〇〇號に發表せられし「印度の佛教藝術に就て」と共に此の方面の最も權威ある研究と云ふべく學界を益する大ならむ本書菊版約四百頁玻璃版十數枚に代表的遺品を載せて對照に便にせりたゞ其の圖小に失して稍鮮明を缺くを憾みとす。(丙午出版社、定價四・〇〇)

●法隆寺壁畫保存方法調査報告

大正五年以來文部省内に保存調査委員會を設けて専門家に屬し各方面より調査をなしつゝありし大和法隆寺壁畫に就いて本年三月第一期の調査を終了せるを機とし其の間に得たる結果を録せるものは是れなり四六倍判本本文百二十八頁和紙刷大小圖版五十二葉の大冊にして外に附録十八頁圖版四葉を添ふに委員會の設置ミ